
下山さんの履歴書

『現代労働問題分析—労働社会の未来を拓く
ために—』[法律文化社・2010年4月]

別冊

別冊「下山さんの履歴書」作成にあたって

本別冊は、藤本武さんの還暦記念論文集『現代日本の労働者』（坂寄俊雄・高木督夫編著、日本評論社、1975年刊）の別冊「藤本さんの履歴書」にならって、下山房雄さんの喜寿記念として作成したものであるが、「はじめに」でも記したように、本書の読者が本別冊を研究や実践を深める際の参考文献集として活用してもらえればというのが編者の願いである。

通常であれば、喜寿記念の業績目録は著作リストを掲げることで十分かもしれない。しかし、下山流の切り口とはどのようなものか理解してもらうには、題名情報のみでは限界がある。そこで、下山さん自らが特徴的著作について概要を記した九州大学経済学会『経済学研究—下山房雄教授・逢坂充教授還暦記念論文集』（第59巻第5・6号合併号、1994年）の巻末記事「下山房雄教授略歴及び著書・論文目録」が有用と考え、活用させていただいた。なお、この巻末記事に掲載されていない論文については、下山さんからの情報、社会政策学会会員業績一覧に加え、本書関係者が手分けして全業績を網羅するようにした。なお、全作品の概要まで作成するに至らなかったが、先行研究を探る際に、是非活用することをお勧めしたい。

さらに、本別冊には一般的には雑文と呼ばれるものも例示的に掲載した。「はじめに」で述べたように、学術論文の形式をとっていけば科学的で、政治的プロパガンダ文書は虚偽的との考えをとらず、むしろ逆のこともあると考えるのが下山さんであり、その考えを採用した。

可能な限り下山さんの著作を集めたつもりであるが、編者の力不足により漏れがある可能性は否めない。しかしながら、本別冊は下山さんの著作の多さを示すためのものではなく（とはいえ、著書16点、論文等211点、その他188点は圧巻であるが）、読者が「労働社会の未来を拓くために」、下山流の独創的な論点も

▽下山さんの履歴書

分析手法の1つとして加えてもらえればとの観点から作成した。下山さんもきっと理解してくれるだろう。

下山さんは、下関市立大学の学長職を辞した後、研究者としての活動に終止符を打つと宣言した。しかし、継続した社会的政治的活動のうちに「学者文化人」の資格での engagement を求められるものがあり、また我々の要請でゼミナール=関東社会労働問題研究会（第1回 2004年5月4日～第52回 10年1月9日。100回をめざしている）を主宰されてきた。後者の活動を通じ、我々の呼びかけに答える形で2009年5月に日本大学で行われた社会政策学会の総会にて学会の名誉会員として学会に戻り、復帰後、最初の著作を本書にも寄稿してもらった。研究者下山が再始動し、執筆活動は続くだろう。より詳細な「履歴書」は次回へと回す理由もここにある。

石井まこと・兵頭淳史・鬼丸朋子・赤堀正成・岡本 一

下山房雄業績目録

著 書

刊行年順に題名、刊行年、出版社、概要（備考）を記載している。ただし、概要（備考）は下山さんによる紹介（九州大学経済学会『経済学研究』第59巻第5・6合併号、1994年）を本別冊の形式に合うように一部修正・加筆した。

【単 著】

(1) やさしい賃金教室，1965年，日本評論社

教育用の啓蒙書であるが年功賃金が能率給・職務給・職能給の各機能を代行していることの説明など独創的展開を行っている作品。『月刊労働問題』連載論文9本の集成。なお、下山さんの最初の活字論文＝「文献解説－日本の賃金問題」（1959.12、季刊・労働法9巻4号）が補講に収められている。その論文で、いわゆる貧困化法則が価値ターム＝剰余価値率の上昇に集約されるとの見解を初めて提起。

(2) 日本賃金学説史，1966年，日本評論社

修士論文に拠りつつ発表した雑誌論文の集成出版。エコノミスト賞候補にミネートされた。日本的低賃金論、賃金と労働力の価値貫徹をめぐる論争、同一労働同一賃金論に関する戦前から戦後にかけての諸学説を、理論的に整序したうえで、その背景となる時代思想の検討を含めて批判的に考察した作品。

(3) 高齢者の労働問題，1978年，労働科学研究所

1970～73年度に東京都労働局の依頼で高齢者の仕事と生活の実態を明らかにする調査研究に従事以来、多数執筆した論文を一書に仕上げた作品。明治大学経営学博士授与論文。

(4) 現代日本労働問題分析―組合運動ルネッサンスのために，1983年，労働旬報社

先行論文13点を序章、前編「賃金闘争・賃金政策の今日的展開」、後編「労働時間・雇用・労働災害」、結章という構成のもとに一書に編纂。最低賃金制

度の再評価、労働時間短縮と労働争議の関係など、今日の雇用・労使関係構造を理解するのに有用な一書であるとともに、下山さんの批判的精神と熱い肉声が伝わる作品。

(5) 搾取と賃金のはなし—経済学入門, 1985年, 学習の友社

賃金論を中心にして資本主義経済の仕組みを入門的に解説した作品。『学習の友』連載論文に『勤労者通信大学月報』『賃金と社会保障 批点評点』に書いた論文何点かをあわせ編集した新書版小著。

(6) 現代世界と労働運動—日本とフランス, 1997年, 御茶の水書房→本書第I部第2章(30頁)参照。

【共著・編著】

(1) 日本の生活時間, 1965年, 労働科学研究所

藤本武・井上和衛との共著(2, 3, 7-10章を分担執筆)。労研式生活時間調査のとりまとめ。収入生活時間の延長に伴う他の生活時間要素の変化が注目された作品。

(2) 労働期間の構造変動に関する分析, 1977年, 労働科学研究所

藤本武・高橋祐吉との共著。

(3) 日本人のライフ・サイクル, 1978年, 労働科学研究所

藤本武・高橋祐吉との共著。電機・鉄鋼・化学におけるオイル・ショック下の離職者の追跡部分を執筆。

(4) 高齢化社会の労働生涯, 1980年, 垣内出版

シリーズ『日本の中高年』の8巻として亀山直幸, 井上和衛, 高橋祐吉, 大西徳明の論文を組織したもの。「総論—高齢化と労働生活」「高齢者雇用生活」「高齢者労働問題の盲点・焦点」の3つの章を執筆。

(5) 現代日本企業と賃金管理, 1982年, 労働旬報社

川辺平八郎「春闘における賃上げ管理の基軸」, 高橋祐吉「労働費用の現状

と問題点」, 小越洋之助「基本給管理と年功賃金見直しの動向」の諸論文に下山執筆の方法論的序章と現状総括的結章とを付して一書に編んだ作品。

(6) 社会政策 (2) —現代の労働問題, 1982 年, 有斐閣

栗田健, 菊池光造との共著で「社会政策」の教科書として作った。栗田が雇用・賃金を, 菊池が労使関係を, 下山が社会保障を執筆。

(7) 日本の労働組合運動 3 巻 要求闘争論, 1985 年, 大月書店

シリーズ全 5 巻のうち労働組合運動の基礎的機能 = 経済要求運動に関わる巻。「雇用・失業問題と労働組合運動」の章を分担執筆。単著 (6) に一部所収。

(8) 現代資本主義と『資本論』, 1991 年, 新日本出版社

服部文男, 黒川俊雄, 金子ハルオとの共著。「現代資本主義と剰余価値論」の章を執筆。現代の労働問題を資本論を使ってわかりやすく分析・解説しており, 資本論を現代日本経済にあてはめて理解するのに便利な作品。

(9) 労働時間の短縮—その構造と理論, 1998 年, 御茶の水書房

大須賀哲夫との共著→本書第 I 部第 5 章 (84 頁) 参照。

(10) 現代の交通と交通労働, 1999 年, 御茶の水書房

共編著→本書第 II 部第 6 章 (104 頁) 参照。

論 文 (書評・講演記録・報告書を含む)

刊行年月順に題名, 刊行年月, 掲載雑誌 (巻号) または出版社, 所収書籍, 概要 (備考) を記載している。概要 (備考) は→に記し, 上記「著書」と同じ, 下山さん執筆部分に一部修正・加筆のうえ, 共著者等がいる場合はここに記載した。なお, 前掲単著・共編著に収録されている論文は原則として省略した。

【労働科学研究所時代 (1958 年 4 月～1967 年 5 月)】

- (1) 貧困階層の存在形態——地方都市での事例研究, 1960. 2- 4, 労働科学 36 巻 2- 4 号→労働科学研究所で従事した最初の調査。内職工賃の決定機構を労

働市場構造の一環として具体的に解明した。

- (2) 日本の労働者の経済的状态, 1961. 4, 経済評論 10 卷 4 号→藤本武との共著。
- (3) 最近における労働者の生活時間構造, 1962. 3- 8, 労働科学 38 卷 3- 8 号→藤本武・森岡静江との共著。
- (4) 家族構成と食糧消費, 1962. 4, 労働科学 38 卷 4 号→藤本武との共著。
- (5) 大都市・大工場労働者の生活水準について, 1962. 8, 労働科学 38 卷 9 号→藤本武・森岡静江との共著。
- (6) 生活水準からみた余暇生活, 1962.11, 労働の科学 17 卷 7 号。
- (7) 製糸労働者の労働と生活, 1963.2・6 & 1965. 5, 労働科学 39 卷 2・6 号 & 41 卷 5 号→井上和衛との共著。
- (8) 東京都内勤労者の外食調査, 1963. 3, 労働科学研究所, 労働科学研究所編『外食に関する調査』所収→藤本武・近松順一との共著。
- (9) イギリス労働婦人の一こま, 1963.5, 労働の科学 18 卷 5 号。
- (10) 文献紹介: 藤本武—労働時間, 内海義夫—労働時間の理論と問題, 1963.10, 労働科学 39 卷 10 号。
- (11) 生活費と生活時間の最低限界, 1964. 2, 月刊労働問題 69 号。
- (12) 弾性値からみた果実消費動向, 1964. 2, 労働科学 40 卷 2 号。
- (13) 労働者家族の外食 (実態), 1964. 4- 5, 労働科学 40 卷 4- 5 号。
- (14) 労働者の生活はどうなっているか, 1964.5, 労働の科学 19 卷 5 号。
- (15) 食品購入量の分布, 1964. 6, 食糧庁食品課, 『食糧品の購買動向調査』所収。
- (16) 通勤時間と外食・欠食, 1964. 6, 労働科学 40 卷 6 号。
- (17) 休日を考え直そう, 1964.7, 労働の科学 19 卷 7 号。
- (18) 家事労働, 1965.2, 平凡社, 『世界大百科事典』 4 卷所収。
- (19) 「年齢別最低生活費」とあるべき賃金, 1965.5, 労働の科学 20 卷 5 号。
- (20) 最近の職務・職能給の動向と問題点—産業構造審議会管理部会「職務給制度の導入とその運営上の諸問題」の紹介と論評, 1965. 6, 労働法学会報

別冊資料5巻3号。

- (21) 労研最低生活費（その1・2），1965.12 & 1966.2，労働の科学 20 巻 12 号 & 21 巻 2 号。
- (22) 調査の方法と立場，1965.12，労働の科学 20 巻 12 号。
- (23) 炭鉱労働者の生活時間—中小炭鉱における事例調査，1966. 5，労働科学 42 巻 5 号。
- (24) 交替制の社会経済的背景，1966. 6，労働の科学 21 巻 6 号。
- (25) 小島健司著『日本の職務給』小池和男著『賃金』年功賃金と職務給を軸に解明，1966. 6，月刊労働問題 97 号。
- (26) 炭鉱労働者の生活と意見，1966. 9 & 1967. 3，労働科学 42 巻 9 号 & 43 巻 3 号→「労働と生活の展開過程においてさまざまな問題を主体的にうけとめる労働者の意識状況，将来への志向性をも内在的に把握」（木本喜美子『広大総合科学部紀要Ⅱ・社会文化研究』6巻）。
- (27) 生活費係数，1967.1，労働の科学 22 巻 1 号。
- (28) 賃金決定における「最低生活費」の考え方，1967. 1，労働法学研究会報 696 号。
- (29) 日本の賃金決定機構，1967. 1，賃金と社会保障 No.409。

【横浜国立大学時代（1967年6月～1987年3月）】

- (30) 現段階の合理化と労働災害，1967. 6，御茶の水書房，『合理化と労働者階級 社会政策学会年報第 14 集』所収。
- (31) 民間林業労働における賃金・社会保障の実態と問題，1967. 6- 7，労働科学 43 巻 6- 7 号→井上和衛との共著。
- (32) 賃金決定機構，1967. 8，日本評論社，舟橋尚道編『講座労働経済 2 巻 日本の賃金』6章→高度成長期の賃金決定メカニズム総体を解明し，「制度論からの脱皮に大きな功績を残した」（星島一夫「賃金決定機構と労働組合」）。
- (33) 書評・山本潔「日本労働市場の構造」，1967. 8，経済評論 16 巻 9 号。

- (34) 学会消息・経済理論学会, 1967.12, 横浜国大・エコノミア No.34。
- (35) 労働市場と賃金 資本蓄積と賃金, 1968. 9, 青木書店, 高木督夫・高橋洗・金子ハルオ編『講座 現代賃金論 1 巻』所収→労働力の社会的再生産の観点・労働者生活での対個人サービス享受の増大・労働市場の複層化などを取り入れた基礎理論を現代的に把握。
- (36) 荒又重雄著「賃労働の理論」—ユニークな労作として 古典的方法による新たな理論化, 1968.10, 週刊読書人 1968 年 10 月 7 日号。
- (37) 造船労働者の労働と生活—某造船工場アンケート調査結果, 1968.10, 労働科学 44 卷 10 号。
- (38) 民間林業労働の労働実態と社会保障の問題, 1968.11, 労働科学 44 卷 11 号。
- (39) 穀物価格 = 労賃論—重商主義・重農主義・古典派経済学の場合, 1968.12, 労働科学研究所→食糧庁の委託研究として行った「物価値上がりについての消費者意識調査」の補論としてとりまとめている。
- (40) 日本的低賃金の学説小史, 1968.12, 青木書店, 高木督夫・高橋洗・金子ハルオ編『講座現代賃金論 2 巻』所収。
- (41) 書評: 荒又重雄著『賃労働の理論』, 1969. 1, 横浜国大・エコノミア No.38。
- (42) 「合理化」と労働科学—E L・D L 委員会「報告書」の批判的検討, 1969. 8, 賃金と社会保障 No.502。
- (43) 「労働と生活についてのアンケート」集計整理資料—続: 造船労働者の労働と生活, 1970. 5, 労働科学 46 卷 5 号。
- (44) 農村における社会保障の実態と問題—老齡年金・医療保障を中心として, 1970. 6, 労働科学 46 卷 6 号→井上和衛, 近松順一との共著。
- (45) 新刊紹介: 関谷耕一・関谷嵐子著『余暇と労働時間』, 1970.12, 横浜国大・エコノミア No.40。
- (46) 初任給: モデル賃金, 1970.12, 『団交のための賃金資料』所収。

-
- (47) 新刊紹介：黒川俊雄著『社会政策と労働運動』, 1971. 3, 横浜国大・エコノミア No.41。
- (48) 時間短縮問題をめぐる現状と問題点, 1971. 5, 賃金と社会保障 No.565。
- (49) 労働者の生活問題, 1971.10, 青林書院新社, 塩田庄兵衛編『労働問題講義』所収→教科書として作成したものが労働科学研究所の生活費・生活時間研究を総括している。
- (50) 資本主義の生産技術と労働災害, 1971.11, 青木書店, 日本科学者会議編『現代技術と社会』所収→労働科学研究所における労災の実証的研究をふまえ展開している。
- (51) 「労働市場調査」への一評釈, 1972. 3, 労働調査論研究ノート No. 8 →院生時代に氏原教授指導のもとに参加した佐久間ダム調査とりまとめにおける氏原理論の批判的検討。なお, この佐久間ダム調査が, 年功賃金 = 日本型職種賃率だとの下山の認識の淵源である。
- (52) 労働災害の絶滅・撲滅への一考察, 1972. 3, 賃金と社会保障 No.596。
- (53) 労働安全衛生法を検討する—日本の安全・衛生問題の現実と課題 (討論), 1972. 3, 賃金と社会保障 No.596。
- (54) 高年齢者の実態 (個人調査編), 1972. 3, 東京都労働局
- (55) 余暇問題をどうとらえるか, 1972. 6, 経済 98 号。
- (56) 社会政策学会第 44 回大会, 1972. 8, 経済セミナー No.205。
- (57) 余暇と労働者生活, 1972.10, 銀行労働調査時報 274 号。
- (58) 安全労働・安全運転と三河島裁判に問われているもの, 1972.12, 労働法律旬報 No.822。
- (59) 七〇年代の労働時間短縮問題, 1972. 2, 労働旬報社, 春闘共闘時短共闘委員会編『労働時間短縮』所収。
- (60) 三河島裁判を検討する (討議) —運転労働と安全性, 1973. 2, 月刊いのち 7 巻 5 号→下山の他, 森清善行, 小木和孝, 宮島尚史, 山田信也が参加。

- (61) 労働問題としての老人問題, 1973. 4, 経済 108 号。
- (62) 高齢者の職業別就業実態, 1973. 5, 労働の科学 28 巻 5 号。
- (63) 労働災害と労働者福祉, 1973. 8, 月刊福祉 56 巻 9 号。
- (64) 定年延長と賃金管理, 1974. 5, 労働の科学 29 巻 5 号。
- (65) 分配率・賃金格差の現状と是正への方向, 1974. 6, 季刊労働法 No.92。
- (66) 大幅賃上げの評価と今後の組合課題 (座談会), 1974. 7, 月刊労働問題 198 号→下山の他, 舟橋尚道, 白石徳夫, 千葉利雄が参加。
- (67) 賃金決定と労働市場の展開, 1974. 9, 日本評論社, 泉卓二編『賃金管理論』所収→価格の成立を, 労働力売手買手の意志行為と市場競争機構との関連において, つまり管理と経済法則との交差として総括している。
- (68) 雇用保険法の問題点, 1974, 横浜市勤労市民ニュース No.140。
- (69) 労働時間と生活時間・余暇, 1975. 1, 東洋経済新報社, 経済学会連合編『経済学の動向 中巻』所収→社会政策学会幹事会の委嘱により日本における労働時間研究史を簡潔に総括したもの。
- (70) 企業「合理化」と労働組合—某鉱山における事例研究, 1975. 3, 横浜国大・エコノミア No.53 →いわゆるドル・ショックによる希望退職募集への金属鉱山 (大同鉱業柵原銅山) 単組の対応の事例研究。
- (71) 「高度成長」期の賃金交渉研究—その意義と限界, 1975. 9, 季刊労働法 No.97。
- (72) 「高度成長」下の鉱山労働者と労働組合, 1975.11, 労働科学 51 巻 11 号→前掲・エコノミア論文 (70) と関連して, 産別組織 = 全鉱が, 西欧的産別指向から企業別組合連合に変わっていく過程を分析したもの。
- (73) 退職金合理化にどう反撃すべきか, 1975. 8, 賃金フォーラム 3 号。
- (74) 労働時間, 1975.10, 金属労働資料 18 巻 10 号。
- (75) 最近における賃金・賃闘論の新展開, 1976. 2, 経済 142 号。
- (76) 埼玉県における婦人労働の実情と展望, 1976. 3, 労働科学研究所刊。

-
- (77) 「高度成長」期の労働者状態（労働・消費・賃金・闘争）の総括的分析—「現代日本の労働者」, 1976. 4, 賃金と社会保障 No.695。
- (78) 新刊紹介：アンドリュウ・グリーン, ポブ・サドクリフ著（平井規之訳）『賃上げと資本主義の危機』, 1976. 6, 横浜国大・エコノミア No.56。
- (79) 賃金をめぐる政府・独占資本の攻撃, 1976.10, 労働運動 No.130。
- (80) 鉱山離職者の状態, 1976.12, 労働科学 52 卷 12 号。
- (81) 文献紹介：労災死傷病報告の正確さ（Monthly Labor Review,99（9）, 1976 抄訳）, 1977. 3, 労働科学 53 卷 3 号。
- (82) 書評：地質学者の職場労働運動の歩みを記す—『大地に刻む』, 1977. 3, 賃金と社会保障 No.718。
- (83) 七七春闘の総括と労働運動の展望, 1977. 7, 月刊労働問題 237 号。
- (84) 高齢者労働問題あれこれ, 1977. 9, 労働の科学 32 卷 9 号。
- (85) 明日では遅すぎる高齢者問題（対談）, 1977. 9, 労働運動 No.141 →大石重一, 塩田庄兵衛との鼎談。
- (86) 七七春闘の総括と労働運動の展望, 1977.10, 日本評論社, 労働運動研究者集団編『階級的労働運動への模索 1』所収。
- (87) やめてよかった？—希望退職者の動向, 1978. 2, 労働の科学 33 卷 2 号。
- (88) 資本主義の危機と労働者（シンポジウム）, 1978. 6, 経済 170 号→下山の他, 青山四郎, 高木督夫, 加藤佑治, 木元進一郎, 平野浩一が参加。
- (89) 78 年春闘総括の視角—春闘・労働運動の現局面, 1978. 7, 賃金と社会保障 No.749。
- (90) 高齢化社会と賃金管理, 1978.11, 労働の科学 33 卷 11 号。
- (91) 歴史のうねりのなかでの七九年春闘, 1978.12, 賃金と社会保障 No.760。
- (92) 雇用創出問題と大衆の雇用闘争の課題（座談会）, 1979. 4, 賃金と社会保障 No.767 →下山の他, 春山明, 永山利和, 酒井謙弥が参加。
- (93) 社会政策における強制と誘導—現状と学説, 1979. 5, 季刊労働法別冊『社

- 会政策』→日本の社会政策が強行法規によらずに行政指導に傾斜していることを雇用や労働時間の面で描き、それと学説の対応を分析している。
- (94) 書評:荒又重雄『賃労働論の展開』, 1979. 5, 御茶の水書房, 『「構造的危機」下の社会政策 社会政策学会年報第 23 集』所収。
- (95) 年功賃金, 1979. 6, 岩波書店, 『経済学事典〔第 2 版〕』所収。
- (96) 書評・山本潔著『読売争議(一九四五・四六年)』, 1979. 7, 東大社研・社会科学研究 31 卷 1 号。
- (97) 戦後日本資本主義と労働者の階級主体形成, 1979. 8, 青木書店, 経済理論学会年報第 16 集『現代資本主義と労働者階級』所収→戦後労使関係の画期を 1960 年代半ばにおく見解を初めて提起。
- (98) 希望退職者の意見, 1979.11, 労働科学 55 卷 11 号。
- (99) 定年制問題と八〇年代労働政策(座談会), 1979.11, 賃金と社会保障 No.782。
- (100) 定年延長と賃金問題, 1979.12, 月刊全国セメント No.137, 第 10 回全セ中央学習・秋闘討論集会における講師講演記録。
- (101) 交替制の社会経済的背景, 1979.12, 労働科学研究所, 労働科学研究所編『交替制勤務』所収。
- (102) 定年退職後の労働と生活, 1980. 1, 労働旬報社, 高木督夫・深見謙介・木元進一郎編『現代中高年問題と労働組合』所収→高橋祐吉との共著。
- (103) 高齢化社会の到来と労働問題, 1980. 2, 東京都労働経済局総務部調査課, 『経済変動と労働問題 2』所収。
- (104) 経済民主主義と大企業労働者(対談), 1980. 2, 経済 190 号→元島邦夫との対談。
- (105) 『死滅』した組合と誕生した『組合』, 1980. 4, 賃金と社会保障 No.792。
- (106) はしがき(不安定就業と社会政策—社外工・パート・日雇い・出稼ぎ), 1980. 5, 御茶の水書房, 『不安定就業と社会政策 社会政策学会年報第 24 集』所収。

-
- (107) 書評:大木一訓著「雇用・失業の経済分析」,小林謙一著「日本の雇用問題」, 1980. 5, 御茶の水書房,『不安定就業と社会政策 社会政策学会年報第 24 集』所収。
- (108) 定年延長と年功賃金, 1980. 4, 産業労働協会,『定年延長企業別事例集』所収。
- (109) 高齢労働者の雇用と生活, 1980. 6, 日本労働協会雑誌 255 号。
- (110) 日本労働運動の現局面と未組織労働者組織化問題, 1980. 8, 月刊TGU189号。
- (111) 労働と民主主義—職場労働運動とナショナルセンター問題, 1980. 9, 唯物論研究 2 号→特集民主主義の論文 7 本の 1 つ。民主主義の原理の形骸化の論理と日本企業の現場の実態の分析を踏まえて労働運動の動向を論じたもの。
- (112) 私の八一年春闘の旗, 1980.12, 賃金と社会保障 No.808。
- (113) 試論:経済学における主体性, 1981. 6, 横浜経営研究Ⅱ 卷 1 号→山田盛太郎, 大塚久雄, 大河内一男の戦前・戦中の研究における学説体系での労働者主体の位置づけを中心としたコンメンタール。
- (114) 社会主義と労働運動 (シンポジウム討論の要約紹介), 1981. 5, 月刊労働問題 287 号→労働運動研究者集団主催シンポジウム。喜安朗, 兵藤剣との討論。
- (115) 日本的経営フィーバーを診断する (座談会), 1981.10, 経済 210 号→下山の他, 角瀬保雄, 北田芳治, 中山金治が参加。
- (116) 労働組合と賃金要求方式—鉄鋼労連賃金政策にふれて, 1982. 1, 月刊 TGU206 号。
- (117) 「日本の労使関係」と労働運動, 1982. 1, 大月書店『講座 今日日本資本主義 4 巻 日本資本主義の支配構造』第 6 章→兵藤剣との共同執筆。
- (118) 青年労働者の雇用と賃金, 1982. 3, 学習の友社, 労働者教育協会編『労働青年白書』所収。
- (119) 労働組合の原点的機能へのチャレンジ, 1982. 3, 賃金と社会保障 No.837 (特集:産業別賃金協約) →全金板橋地域支部刊『板橋秀夫—その人と生活』に触発されて, 個人加盟地域労組が地域別業種別社会的賃金交渉主体になれなけれ

- ば、英米流の大きな一般労組になれないとの問題を指摘。
- (120) 定年延長と年功賃金, 1982. 4, 啓文社, 『社会政策叢書 第三集 高齢化社会の社会政策』所収。
- (121) 「余暇」をどうとらえるか, 1982. 6, 経済98号。
- (122) 現代日本の支配構造「『日本的労使関係』賛美論批判」(討論要旨), 1982. 7, 賃金と社会保障 No.845 →報告者・兵頭釗とコメンテーター・菊池光造の討論の要旨。
- (123) 理論生計費, 1982.10, 労働の科学 37 卷 10 号
- (124) 低成長下の労働者・農民, 1982.10, 労働の科学 37 卷 10 号。
- (125) 「臨調行革」と日本の進路, 1982.12-1983. 1, 賃金と社会保障 No.856-857。
- (126) 日本経済上出来論の破綻, 1982.12, 総合労働研究所, 『団交のための賃金資料』所収。
- (127) 経済危機と政府・独占の新たな攻撃, 1983. 2, 月刊 TGU219 号。
- (128) 労務管理のあり方と事故—「労働と安全に関する研究者の会」シンポジウムにおける論点, 1983. 3, 賃金と社会保障 No.862 →宮島尚史との共作。
- (129) 職場民主主義確立の理論と実践, 1983. 3, 労働法律旬報 No.1067 →下山の他, 青木慧, 伊藤幹郎, 稲田一男, 上条貞夫, 三瀬勝司による執筆。企業内集団暴力の実相と教訓—現場からの報告。
- (130) 就業・雇用構造の変貌とこれからの労働運動(座談会), 1983. 3, 東京都労働経済局総務部調査課, 『経済と労働』57号所収→兵藤釗, 高木郁朗, 亀山直幸が参加。
- (131) 賃金・労働市場の理論展開における諸問題—平石修氏の批判に答えて, 1983. 5, 未来社, 黒川俊雄・佐野稔・西村豁通編『社会政策と労働問題』所収。
- (132) 国鉄再建と今後の労使関係, 1983. 6, 季刊労働法 No.128。
- (133) 公務員退職金問題の攻防—官民の連帯を求めて(座談会), 1983. 8, 賃金と社会保障 No.872 →下山房雄の他, 金田豊, 松井朗が参加。

-
- (134) 民主主義は工場の外でも立ちすくむ, 1983.11, 労働法律旬報 No.1083-84 → 関西電力事件最高裁判決への見解。
- (135) 高齢化社会における技術革新の意味, 1983.11, ジュリスト増刊 32号 → 鷲谷徹との共同執筆。
- (136) 労働運動の今日的課題 (第6回定期大会記念講演), 1983.12, 自交労働者月報 86号。
- (137) 日経連「労働問題研究委員会報告」にみる財界の思想の批判, 1984. 2, 機関誌連合通信社 → 日経連の春闘政策とその基盤思想とを批判したもの。
- (138) 書評: 労働組織近代化の世界史的過程を描く—藤本武著『組頭親方制度の研究』, 1984. 3, 賃金と社会保障 No.886。
- (139) 「貧困化法則」論, 1984. 5, 日本の科学者 19巻5号 → マルクス『経済学批判要綱』に依拠しつつ行われた小松善雄氏の絶対的貧困化論に触発されて, 剰余価値率に加えて労働者1人あたり資本量という定量規定で法則把握をすべきことを提起。
- (140) 公務員賃金の役割と今日の労働運動, 1984. 5, 住民と自治 1984年5月号。
- (141) 日本の労働問題 (シンポジウム) —労働者の生活と意識, 1984.10, 日本労働協会雑誌 No.305 → 討議者として参加。報告は下田平裕身, 討議者は下山の他, 石川晃弘, 山崎清, 司会は氏原正治郎。
- (142) 建設産業の賃金と労働組合, 1984.12, 建設 No.35。
- (143) Emploi et salaire des jeunes travailleurs japonais, 1985. 9, 横浜経営研究 6巻2号 → (118) の翻案的仏語版。
- (144) 最低賃金制の現段階—61年「中賃答申」をめぐって (座談会), 1986. 4, 季刊労働法 No.139 → 下山の他, 金子美雄, 牧野富夫が参加。
- (145) 社会政策と労資交渉—最賃制闘争への問題提起的試論, 1986. 6, 労働運動 247号。
- (146) 現代の労働と高齢化 (シンポジウム報告), 1986.12, 賃金と社会保障

No.951。

- (147) Une Représentation du travailleur au Japon, 1986.12, 横浜経営研究7巻3号→「日本の労使関係」の学説を文化論, 収斂論, 歴史的社會形成論の3類型に分類したうえで, 年功賃金, 終身雇用, 労資関係の戦後の構造の変遷を解説。
- (148) 生きることと労働時間短縮, 1987. 2, 賃金と社会保障 No.956。
- (149) 労働組合と賃金闘争—賃金闘争の歴史とも関連して, 1987. 3, 日教組・大学部時報8号。

【九州大学時代 (1987年4月～1997年3月)】

- (150) 労働時間法制が改悪される, 1987. 5, 賃金と社会保障 No.961。
- (151) 書評: 石田英夫著『日本企業の国際人事管理』, 1987. 5, 御茶の水書房, 『日本の労使関係の特質—社会政策学会年報第31集』所収。
- (152) コメント: 部分から普遍への跳躍—資本主義的社會関係に代わるもの, 1987. 7, 賃金と社会保障 No.966。
- (153) 指名解雇と沖電気, 池貝鉄工争議, 1987. 7, 大月書店, 『事典—日本労働組合運動史』所収。
- (154) 現代資本主義と雇用・失業問題, 1988. 3, 東京自治問題研究所, 『変動期の都市と雇用』所収。
- (155) 現代の労働時間問題, 1988. 5, 御茶の水書房, 『現代の労働時間問題—社会政策学会年報第32集』の巻頭論文→時短の経済の諸論点, 「弾力化」と「人間化」の交差, 立法・協約の機能の異同を解明。
- (156) 時代の転変, 1988.9, 労働の科学43巻9号。
- (157) レーガン政府の規制緩和と労働者・労働組合—アメリカ労働調査協会刊『経済ノート』86年11月号, 規制緩和特集の抄訳と解説, 1989.1-2, 月刊TGU288-289号→九州大学経済学部生・内田義則との共著。

-
- (158) 再編問題と賃金闘争, 1989. 3, 東京土建・建設 No.53 →建設業町場への大資本の進出と横断的労働市場における賃金決定機構の変化の展望を分析。
- (159) 労働市場国際化への対応, 1989.7, 労働の科学 44 卷 7号。
- (160) 調査最終報告にあたって, 1989. 9, かながわ総合科学研究所, 首都圏建設産業調査委員会編『「町場」の現代的再成のために—地域と産業の民主的改革をめざす首都圏建設産業調査研究報告書』の序部分。
- (161) 労働者協同組合をめざすタクシー労働者—自交総連大分地連セキタクシーなど, 1989. 9, 仕事の発見 12号。
- (162) 高齢化社会の雇用保障と生活保障—労働省「高齢者就業実態調査」を読む, 1989.11, 中央社保協・社会保障 No.247 →労働省「高齢者就業実態調査」を解説しながら, 高齢者の雇用=年金政策について論じている。
- (163) 労働組合運動と産業政策, 1990. 4, 国労教育センター・交通と労働研究会会報 5号。
- (164) 書評: 中村静治著『唯物史観と経済学』, 1990. 4, 日本の科学者→中村静治の史観において技術変革に拠る産業革命が重視され政治変革による市民革命が無視されていることを批判。
- (165) 書評: ドラッカー著『新しい現実』, 1990. 5, 経済 313号→ドラッカーのベストセラーを新保守主義アンカーとしての体系性を欠く恣意的博識の展開と批判したもの。
- (166) 始終業管理にみる労働時間問題, 1990. 7, 労働科学研究所, 労働科学研究所編『勤務時間制・交代制』所収→1979年に電機労連, 合化労連, 全国金属の協力を得て行った始業・休憩時間・終業管理の実態調査のとりまとめ。類似調査がないので貴重。
- (167) 続・時代の転変, 1990.7, 労働の科学 45 卷 7号。
- (168) 書評: 河西宏祐著『企業別組合の理論 もうひとつの日本的労使関係』, 1990.10, 東大・経済学論集 56 卷 3号→河西の企業別少数派組合論の展開を積極

的肯定的に評価する。

- (169) 夜業有害論は偏った思想か, 1990.12, 労働の科学 12 卷 45 号。
- (170) 医療技術労働の発達構造, 1991. 2, 九大・経済学研究 56 卷 5- 6 号→現代医療労働の協業・分業の問題点をテーロリズム分析的方法で論述展開。
- (171) 賃金決定・労働市場組織化におけるわが国職能別組合の現代的可能性, 1991. 3, 科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書(1990年度)。
- (172) 賃上げなしの新しい時代を主張一日経連の『労働問題研究委員会報告』批判, 1991. 3, 月刊労農のなかま 28 卷 3 号。
- (173) J R 一分割民営化と国鉄労資関係, 1991. 5, 大月書店, 牧野富夫編『日本的労資関係の変貌』所収。
- (174) 女性解放運動と労働組合運動, 1991. 6, 女性労働問題研究 No.22 →フランスにおけるフェミニズム運動を労働組合運動との関わりで現地から報告した論文。
- (175) 書評: 社会保障研究所編『高齢社会への生活変容』, 1991. 6, 御茶の水書房, 『社会保障改革の現局面 社会政策学会年報第 35 集』所収。
- (176) はしがき, 1991. 7, かながわ総合科学研究所, 「大都市・開発・県境問題」調査研究委員会『大都市・開発・環境問題調査研究報告書- 「民活」型開発の典型「MM21」を事例とした典型地域調査編』所収。
- (177) 人間らしく生きるために, 1991. 9, 大阪職対連・労働と健康 17 卷 5 号→現下の労働時間問題を週 40 時間制・残業規制・年次有給休暇それぞれの独自性において分析。
- (178) わが国の労働時間制度の問題点, 1991.12, 産業医学 33 卷 7 号。
- (179) Emploi et salaires des jeunes_le mode'le japonais,1993.2,Panoramiques No.9 →前掲論文(143) Emploi et salaire がフランスの総合雑誌『展望』の編集者の目に止まり, その後の 10 年の経緯を踏まえ改筆してほしいとの注文に応じたもの。

-
- (180) はしがき, 1993. 2, 日本自治体労働組合総連合神奈川県本部, 『自治体労働組合運動の90年代課題』調査研究報告』所収。
- (181) 書評: 東京大学社会科学研究所編『現代日本社会5巻 構造』, 1993. 9, 労働の科学48巻9号。
- (182) 労働運動をめぐる最近の情勢と建設関係労組の役割—運動の展望(上)(下), 1993.10・12, 建設政策33・35号→レーニン『何をなすべきか』, マルクス『経哲草稿』の現代的解釈を提起している。
- (183) 日本の労働時間, 1993.12, 日大・経科研レポート3号。
- (184) Une note pré comparative sur l'individualisation des salaires en perspectives historique et internationale, 1993.12, 九大・経済学研究59巻1-2号→査定により個人賃金決定を行うシステムのフランスにおける現状を歴史的国際的比較において意味づけた論文。
- (185) 書評: 「錆色の路」編集委員会(代表・嵯峨一郎)編『錆色の路 国労熊本・四〇年の証言』, 1993. 6, 御茶の水書房, 『現代の女性労働と社会政策 社会政策学会年報第37集』所収。
- (186) 書評: 相澤與一著『社会保障「改革」と現代社会政策論』, 1994. 1, 労働総研クォーターリー No.13。
- (187) 労働時間, 1994. 2, 平凡社, 『日本史大辞典6巻』所収。
- (188) Relations professionnelles au Japon de l'après-guerre_Leurs aspects actuels et leurs origines sociales. Présentation des faits suivies de commentaires Methodologiques, 1994. 3, 九大・経済学研究59巻3-4号。
- (189) 書評: 社会政策学会編『現代の女性労働と社会政策』, 1994. 6, 大原社会問題研究所雑誌 No.427 →現代の女性問題として家父長制の根拠と労働の変化, 家族扶養費の学説変遷, 同一価値労働同一賃金, コース別雇用管理の問題を取り上げ論じている。
- (190) 労働組合運動と労働内容, 1994. 8, かながわ総研・看護労働共同調査研

究委員会, 『看護労働共同調査研究報告』 五章。

- (191) 第4 銀行定年裁判 1・2 審判決の問題点, 1995. 6, 銀行労働調査時報 551 号。
- (192) 日本型企业社会と労働組合の課題, 1995. 7, 経済科学通信 No.79。
- (193) 戦後日本資本主義と労働組合運動—「日本の経営」の生成・発展・「消滅」, 1996.10, 青木書店, 経済理論学会編『経済理論学会年報 第33集』所収。
- (194) レギュレーション理論一考, 1997. 1, 労働総研クォーターリー No.25。

【九州大学定年退職以降（1997年4月～2004年3月）】

- (195) 「日本の労使関係」と年功賃金・定年延長, 1997. 5, 御茶の水書房, 『野口雄一郎教授古希記念論文集 コンビナートと現代産業・地域』Ⅲ現代資本主義の諸側面に所収。
- (196) 新たな福祉社会と協同労働—「商品生産労働・雇用労働」を問う新たな「協同労働」の提唱, 1997. 9, 仕事の発見 No.23。
- (197) 書評：兵藤磯著『労働の戦後史』上・下, 1997.10, 国労文化 457 号。
- (198) 書評：戸木田嘉久著『「構造的失業」時代の日本資本主義』, 1998. 4, 労働総研クォーターリー No.30。
- (199) グローバル経済と労働組合—Think globally, Act globally, 1998. 9, 全労連・交流と資料 20 号→第二次大戦後数年の日本の工場は, 世界史的には「資本の専制」の場である工場が「解放区」になったので, 労組は工場別組合として誕生した。その地域と産業への拡大が 1950 年前後の階級闘争敗北によって妨げられ, 企業別組合に固化されたと議論している。
- (200) 社会政策学の一世紀と賃労働の理論の半世紀と, 1998.10, 啓文社, 『社会政策学叢書 社会政策学会 100 年—百年の歩みと来世紀にむかって』所収。
- (201) 新福祉国家の構造と公務労働者, 1998.11, 下関市立大学論集 42 卷 2 号。
- (202) 中山尊教授を送ることは, 1999. 1, 下関市立大学論集 42 卷 3 号。
- (203) 神奈川外語短大教員金子幸代さん解雇事件—なぜ, 私は金子さんを応援す

るのか，1999. 5，賃金と社会保障 No.1249。

(204) 古園井・篠崎両先生をおくる言葉，2000. 1，下関市立大学論集 43 巻 3 号。

(205) 書評：香川正俊著『第 3 セクター鉄道』『第 3 セクター鉄道と地域振興』，2001. 4，労働総研クォーターリー No.42。

(206) 書評：山崎清著『社会形成体と生活保障』，2002. 1，労働総研クォーターリー No.45。

【下関市立大学退職以降（2004 年 4 月～）】

(207) 書評：山本潔著『日本の労働調査（1945～2000 年）』，2004.12，労働法律旬報 No.1590。

(208) 労研で創ったもの・労研で学んだこと，2005.12，労働の科学 60 巻 12 号。

(209) 国鉄一〇四七名解雇撤回闘争の到達点と今後の課題，2006. 7，労働法律旬報 No.1628，国際労働研究センター主催のシンポジウム（2006. 2.18）報告原稿→下山はパネリストとして報告，他に萩尾健太，坂田晋作，山下俊幸が参加。コーディネーターは戸塚秀夫。

(210) 資本論 1 巻 15 章における労働力価格の運動について，2007.10，日大・経済集志 77 巻 3 号（牧野教授退職記念号）→賃金が労働力価値以上に決定される機構の『資本論』における展開を摘出し，服部文男編『資本論索引』（1997 年，新日本出版刊）が賃金価値以下決定の通説に傾斜している問題を含むことを指摘した作品。抜刷は服部さんに送られたが，彼が彼岸に「旅立つ」のと行き違うことになった。

(211) フランスのバカンス，2008. 8，労働の科学 63 巻 8 号。

【その他（「雑文類」の例示）】

学術論文以外に下山さんが執筆してきた随筆や評論を掲載誌ごとに，題名，発行年月，号数の順に記載している。論文リスト作成作業の経緯から，上掲「論文」

の部に挙げるべきものがここにあり、その逆もある形になっているが、学術論文も「雑文」も本質において同じものとの下山さんの考えに寄りかかって、ここにある形で提示する。了解されたい。なお、論文の部におけると同様、前掲単著・共編著に収録されているものは省略した。

[1] 労研維持会資料

都市労働者（労務職・職員）の家計に関する資料（1）（2）世帯主定期本業収入階層別の世帯収入構成について 1960. 4・11, No.178・192。

最近における労働者の生活時間について 1961. 10, No.213。

労働者の昼食外食実態調査の紹介（その1） 1964. 3, No.288。

労働者の昼食外食実態調査の紹介（その2） 1964. 4, No.290。

企業内賃金決定についての『労働経済学』の見解 1964. 6, No.296。

都市大工場労働者の余暇生活 1964. 10, No.308。

災害原因についての労働者の意識 1966. 5, No.363。

「最低生活費」についての解釈と資料紹介 1966. 11, No.381。

「年功賃金」論 熟練と賃金に関する一考察 1967. 8, No.412。（『労働科学』43巻8号掲載）

高齢者の熟練をめぐって 1967. 12, No.601-603。

中高年の疾病・健康・欠勤 1973. 10, No.634。

最近の紡績労働事情 1976. 1, No.714。

婦人の雇用・勤労条件の動向 1976. 8, No.734-735。

定年制の近況 1977. 5, No.761-762。

始終業・休憩管理の実態 1979. 11, No.854。

[2] 『東京大学新聞』

労働災害と生産技術, 1971. 2, 2月15日号。

[3] 『日本読書新聞』

荒又重雄著「価値法則と賃労働」村串仁三郎著「賃労働原論」—賃労働研究における対比的成果—マルクス主義政治経済学批判体系の上向展開, 1972.10, 10月2日号。

[4]『賃金と社会保障』コラム (労働時評, 批点評点)

〈労働時評〉

戦後日本の労働組合—その過去と未来, 1974. 7, No.653。

「審議会委員」につき論ず, 1974. 8, No.655。

スピード違反判定と科学性—「ねずみとり裁判」をめぐる, 1974. 9, No.656。

75春闘の行方を案ずる, 1975. 3, No.669。

六〇年代の一つの評価, 1976.12, No.712。

〈批点評点〉

何を見ているのか—新聞の読み方, 1977. 7, No.721。

「天下太平」状況と労働主体論, 1978.11, No.757。

右翼的状况を民主的状况へ, 1978.11, No.758。

デマの効用と真実への懲罰, 1979. 3, No.766。

80年代への一つの礎石, 1979.12, No.784。

年功賃金修正とドン・キホーテのたたかい, 1980. 8, No.799。

連合・連帯・統一, 1981. 3, No.814。

続・スピード違反判定と科学性, 1981.10, No.828。

モアイとキラパジュンの来日, 1982. 3, No.838。

高能率・不採算の国有鉄道の意義 (補), 1982.11, No.853。

失対 65 歳線引きへの一批判, 1983. 5, No.865。

雇用減量と定年延長の関係, 1984. 9, No.898。

現代版『くもの糸』, 1986. 8, No.944。

[5] 特定非営利活動法人かながわ総合政策研究センター (NPO かながわ総研)『研究と資料』(No.149 までは『かながわ総合科学研究所 所報』)

- 神奈川県政の現状をめぐって 報告①—産業・労働, 1981.10, No. 3。
現代的貧困と労働者階級のたたかい, 1985. 2, No.19。
かながわ総合科学研究所の80年代後期計画の実践にむけて, 1986.10, No.27。
21世紀を労働者はどう生きるか—その主体形成を求めてパート I, 1987. 4, No.29。
時代は変わる—第9回総会開会挨拶, 1987. 9, No.31。
「労戦再編」問題と賃金闘争—89春闘にあたって労働組合の原点的立場の貫徹を訴える, 1989. 2, No.38。
かながわ総研第12回総会あいさつ, 1990. 7, No.45。
「大都市・開発・環境問題調査研究」について, 1991. 8, No.51, 米倉信との共著。
うわのそら—マスコミの頹廢, 1993. 8, No.63。
かながわそうけんセミナー 開会のあいさつ, 1994. 2, No.67。
時局偶感, 1994.12, No.72。
戦後50年・社会運動の視点と課題, 1995.12, No.79。
大学教員任期制—クビキリ制に反対する, 1996. 4, No.81。
読書の頁 藤本武著「アメリカ資本主義貧困史」, 1997. 2, No.86。
読書の頁 横浜寿町に生き死ぬ老人たち—庄谷怜子著「現代の貧困の諸相と公的扶助」, 1997. 6, No.88。
読書の頁 組合活動・政治活動への参加を青年に呼びかける著作（中田進著 新日本出版96年7月刊新書版 156頁）, 1997.10, No.90。
規制緩和思想の歴史的位罫, 1997.12, No.91。
『ナニワ金融道』のルーツ：青木雄二『さすらい』, 1998. 2, No.92。
21世紀に向かう労働組合運動の課題と展望, 1998. 4, No.93。
日中両国共産党共通の課題・私の解釈, 1998.12, No.97。
経済原論論争六題① 労働力商品価値はどこに?, 1998.12, No.97。
経済原論論争六題② 使用価値の量は計れる!, 1999. 2, No.98。

-
- 経済原論論争六題③ 労働強化による剰余価値生産は絶対的？相対的？, 1999. 4, No.99。
- 読書の頁 渡辺利夫著「中国経済は成功するか」, 1999. 6, No.100。
- 加藤佑治会員の逝去を悼む, 1999. 6, No.100。
- 経済原論論争六題④ 労働力価値と価格の一致・不一致問題, 1999.10, No.101。
- 経済原論論争六題⑤ 価値量の規定－社会的必要労働時間の大きさ－加重平均支配平均・平均原理限界原理, 2000. 4, No.104。
- 経済原論論争六題⑥ 経済学の方法＝抽象は非現実的仮定？, 2000. 6, No.105。
- 赤馬通信 靖国公式参拝と国鉄分割民営化の接点, 2001. 8, No.112。
- 赤馬通信 渡邊崋山のこと, 2001.10, No.113。
- 赤馬通信 ～～からの自由, 2001.12, No.114。
- 赤馬通信 テロ国家アメリカを描く本と映画, 2002. 2, No.115。
- 赤馬通信 市川正一碑前祭参加のことなど, 2002. 4, No.116。
- 赤馬通信 銘菓「舌鼓」, 2002. 6, No.117。
- 赤馬通信 私の学長の仕事, 2002. 8, No.118。
- 赤馬通信 70人・10万人・90万人一日朝首脳会談コメント, 2002.10, No.119。
- 赤馬通信 江華島（カンファド）と板門店（パンムンジヨム）を訪ねる旅, 2002.12, No.120。
- 赤馬通信 下関市大国際シンポ顛末記, 2003. 2, No.121。
- 赤馬通信 戦争が始まりました。戦争に反対しましょう, 2003. 4, No.122。
- 赤馬通信 日本の大学は何処へ行く？, 2003. 6, No.123。
- 赤馬通信 軍事大国＝日本, 2003. 8, No.124。
- 赤馬通信 都留重人『体制変革の展望』の労働論, 2003.12, No.126。
- 投稿のページ 東京新聞への投書－ボツ, 2004. 8, No.129。
- 現代フランス三題噺 マルク・モーリスとの対話, 2006. 2, No.137。
- 椎名恒さんへの弔文（2006年11月1日付け）, 2006.12, No.142。

この本読みました 緑陰特集・私の書籍紹介（山崎圭一『リオのビーチから経済学』、稲葉・立岩『国家と所有のゆくえ』、ハミッド・ダバシ『イラン 背反する民の歴史』）、2008.6 & 8, No.150。

読書の扉 竹内章郎『新自由主義の嘘』を読んで、2009. 4, No.154。

読書の扉 孫崎亨『日米同盟の正体』を読んで、2009. 6, No.155。

読書の扉 福島重雄・大出良知・水島朝穂編著『長沼事件 平賀書簡 35年目の証言 自衛隊違憲判決と司法の危機』、2009. 8, No.156。

読書の扉 本田昇著・中村隆一編『松川事件 60年の軌跡』、2009.12, No.158。

[6] 機関紙連合通信・隔日版

最賃制のはなし①～③（賃上げと最賃制、その仕組みと歩み、現状と闘争の方針）、1978. 4, 3914号。

[7] 『朝日ジャーナル』

書評：青木慧『ニッポン丸はどこへ行く』—日本的経営の裏舞台を描く、1983. 9, 9月16日号。

[8] 『学習の友』

団結の意味をいまあらためて考える、1983.10, 10月号。

書評：宮原寿男『NEC／日本電気の光と影』、1984. 1, 1月号。

[9] 『日ソ経済調査資料』

商店などの営業時間と看板と—第2回訪ソ経済視察団の感想、1985. 3, 634号。

[10] 勤労者通信大学『月報』

右翼の呼称～日本とヨーロッパの違い～、2005. 8, 2005年7号。

[11] 日朝協会機関紙『日本と朝鮮』

私の心の朝鮮 1 チョーセンという言葉、1989. 1。

私の心の朝鮮 2, 3 ソ連であった朝鮮人たち、1989. 2- 3。

私の心の朝鮮 4 朝鮮戦争と風早さんの掌、1989. 4。

私の心の朝鮮 5 「近くて近い国」へ、1989. 5。

-
- 私の心の朝鮮 6 秀吉—ピサロ—裕仁天皇, 1989. 6。
朝鮮を勉強しよう 1 六十の手習い—ハンゲル学習奮闘記, 1993. 8。
朝鮮を勉強しよう 2 開発と民主化—滝沢秀樹『韓国経済発展と社会構造』を
読む, 1993. 9。
朝鮮を勉強しよう 4 ハフェビョルシンクツタルノリを観る, 1993.11。
朝鮮を勉強しよう 5 韓国=南朝鮮の反原発運動, 1993.12。
朝鮮を勉強しよう 6 キムオモニとカズ—山田洋次映画『学校』を観る, 1994. 1。
朝鮮を勉強しよう 7 名護屋城博物館を訪ね城址より壱岐を観る, 1994. 2。
朝鮮を勉強しよう 8 萩さんの『朝鮮戦争』(文芸春秋社刊), 1994. 3。
朝鮮を勉強しよう 9 朝鮮を勉強しよう, 1994. 4。

[12] 『神奈川労働調査センター情報』

- シリーズ労働運動—人間らしい労働と生活, 1997. 1, 2号。
シリーズ労働運動—一時短闘争に取り組む観点, 1997. 4, 5号。
シリーズ労働運動—産業空洞化と民主的規制, 1997. 5, 6号。
シリーズ労働運動—中小企業労働運動, 1997. 6, 7号。
シリーズ労働運動—労働組合運動論, 1997. 8, 9号。
シリーズ労働運動—技術革新と労働者, 1997. 9, 10号

[13] 『下関市立大学広報』 <http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/pub/index.html>

- 学長就任にあたって, 1998. 6, 25号。
青島大学を表敬訪問, 1999. 2, 27号。
ソクラテスは何故? 2000年度下関市立大学卒業式学長式辞, 2001. 6, 34号。
オーストラリア大学訪問, 2002. 2, 36号。
海図のある旅へ 2001年度下関市立大学卒業式学長式辞, 2002. 6, 37号。
下関市大へようこそ—何を何故どのように学ぶか 2002年度入学式学長式辞,
2003. 6, 40号。
瘦せた豚の生き方 2002年度卒業式学長式辞, 2003. 6, 40号。

私と下関の奇しき縁, 2004. 2, 42号。

[14] 山口大学日中学術交流奨励会『やまぐち留学生交流』

巻頭言 どういう国際性か, 1999. 3, 10号。

[15] 『月刊健康』

仲哀天皇と神功皇后の夫婦喧嘩, 1999.11, 501号。

[16] 『毎日新聞』

大人が真剣だった時代—平井『三池争議』が問いかけるもの, 2000.12.8夕刊, 毎日新聞西部版。

[17] 山口孝・芹澤寿良責任編集『人として』

闘争勝利に向かうことを願って 組合差別禁止 = 労組法7条は戦後民主主義の基盤, 2002. 9, 9号。

国労関係「ILO連絡会」に参加して 反組合的雇用差別禁止 = ILO87号・98号条約は民主主義社会の基盤, 2003. 3, 12号。

「国労5・27臨大闘争弾圧裁判」を傍聴して, 2003. 9, 14号。

[18] 東大経済学部同窓会機関誌『経友』

海兵・陸士不合格で帝大経済学部へ—義父の足跡, 2005. 6, 162号。

[19] 国労5・27臨大闘争弾圧を許さない会

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/yurusanai/>

〈公判報告〉

第49回公判(2005.12.13)を傍聴して一言, 2005.12.16。

第50回公判(2005.12.21)を傍聴して一言, 2005.12.24。

第51回公判(2006. 1.11)を傍聴して一言, 2006. 1.14。

第52回公判(2006. 2. 1)を傍聴して一言, 2006. 2. 5。

第53回公判(2006. 2.22)を傍聴して一言, 2006. 2.28。

第54回公判(2006. 3.15)を傍聴して一言, 2006. 3.22。

第55回公判(2006. 3.29)を傍聴して一言, 2006. 4. 3。

第 56 回公判（2006. 4.19）を傍聴して一言，2006. 4.26。
第 57 回公判（2006. 5.10）を傍聴して一言，2006. 5.18。
第 58 回公判（2006. 5.31）を傍聴して一言，2006. 6. 5。
下山房雄の第 59 回公判（2006. 6.21）を傍聴して一言，2006. 6.27。
下山房雄の第 60 回公判（2006. 7.12）を傍聴して一言，2006. 7.17。
下山房雄の第 61 回公判（2006. 7.26）を傍聴して一言，2006. 7.31。
下山房雄の傍聴記 第 77 回公判（2007. 6.13）を傍聴して一國労修善寺大会の歴史的意義を破壊する 02 年 5.27 臨時大会開催，2006. 6. 5。
下山房雄の傍聴記 第 78 回公判（2007. 6.27）を傍聴して一國鉄→JR のクビキリ再版＝社保庁→年金機構と組合内少数潮流の組合活動の権利を考えた，2006. 7. 5。
下山房雄の傍聴記 第 79 回公判（2007. 7.11）を傍聴して一犯罪謀議ではない！解雇反対貫徹の組合活動だ！，2007. 7.16。
下山房雄の傍聴記 第 81 回公判（2007. 9. 5）を傍聴して一民衆の権利闘争を抑圧蹂躪した国家の責任，2007. 9.12。
下山房雄の傍聴記 第 82 回公判（2007. 9.26）を傍聴して一5/27 大会バス出発を 30 分遅らせたのは暴力ではなく説得の力，2007.10. 1。
下山房雄の傍聴記 第 83 回公判（2007.10.31）を傍聴して一この内容の「実行行為」を暴力犯罪とするのか!？，2007.11. 7。
下山房雄の傍聴記 第 84 回公判（2007.11.14）を傍聴して一松崎さんの尋問試合最終回一防衛戦に勝利！，2007.11.19。
下山房雄の傍聴記 第 85 回公判（2007.12. 5）を傍聴して一富田さん一堂々三時間半の労働安全講義，2007.12. 9。
下山房雄の傍聴記 第 86 回公判（2007.12.26）を傍聴して一青柳裁判長への????，2008. 1. 5。
〈会 報〉
鉄建公団訴訟と国労臨大闘争弾圧刑事裁判との関係，2005. 3，14 号。

鉄建公団訴訟と国労臨大闘争弾圧刑事裁判との関係（続），2006. 3，20号。

[20] 国労『国鉄新聞号外 国鉄闘争に連帯する会特集』

音威子府・稚内・名寄・旭川四闘争団を訪ねて，2006. 7.20。

[21] Bulletin (Center for Transnational Labor Studies)

Presentation for the symposium 'Achievements and Tasks of the Reinstatement Campaign for the 1,047 Dismissed JNR Workers', 2007.2, No.10, 前掲論文 (209) の英語版。

[22] 新かながわ社『新かながわ』

自由の窓 1 人生を続けるということ，2008年正月合併号。

自由の窓 2 人生を続けるということ—続，2008年1月20日号。

自由の窓 3 日仏首脳の年頭記者会見評，2008年1月27日号。

自由の窓 4 世田谷国公法事件18回公判，2008年2月3日号。

自由の窓 5 日本フィル横浜定期演奏会，2008年2月10日号。

自由の窓 6 「母べえ」を観て声を上げよう，2008年2月17日号。

自由の窓 7 新刊紹介「ザレイプオブ南京」，2008年2月24日号。

自由の窓 8 世田谷国公法事件19回公判，2008年3月2日号。

自由の窓 9 秋葉山二号墳上の憲政碑，2008年3月9日号。

自由の窓 おわり 憲法どおりの日本をつくろう，2008年3月16日号。

[23] えびな九条の会『会報』

日本国憲法九条を守り世界に輝かせよう，2006. 7，1号。

議論すれば多数派になる！ 北朝鮮が攻めて来る？，2006. 8，2号。

「有馬九条の会」生誕への胎動，2006.11，5号

九条改憲はアメリカの押しつけ!!，2006.12，6号。

鈴木安蔵の獄中詠三首，2007. 1，7号。

「国民投票法」反対！三・一六集会，2007. 3，9号。

「憲法九条を世界遺産に」，2007. 4，10号。

映画「日本の青空」を観ましょう, 2007. 7, 13号。
アフガン戦争イラク戦争支援の給油継続反対!, 2007.10, 15号。
「日本の青空」海老名上映会・挨拶, 2007.12, 17号。
九条かながわの会・第九回交流会, 2008.02, 19号。
神奈川憲法アカデミア発足, 2008. 3, 20号。
反戦平和のウォーキング 9条ピースウォークに参加しませんか!, 2008. 4, 21号。
平和行進 感想, 2008. 5, 22号。
九条違憲の座間基地は要らない!, 2008. 6, 23号。
統一戦線の前進を願って, 2008. 7, 24号。
かながわ九条の会交流会のご報告, 2009. 3, 30号。
かながわ九条の会第15回交流会のご報告, 2009. 7, 34号。
改憲論者鳩山由起夫氏に護憲活憲の政治をさせる道, 2009. 9, 36号。
感激!! 一大沢豊監督『いのちの山河』!!, 2009. 11, 38号。
九条護憲活憲の気持ち一杯の人々で議員会館は一杯! 2010. 1, 40号
私と憲法九条, 2010. 3, 41号。

[24] 河上肇記念会『会報』

説教強盗妻木松吉が獄中で河上肇と遇う話し, 2008. 7, 91号。

[25] 『地域と労働運動』

2008年12月24日—JR東日本株主会会長として初仕事の日, 2009. 2, 100号。

[26] 日本コリア協会・福岡『日本とコリア』

暴かれる朝鮮戦争時の惨劇「ノグンリ虐殺事件 君よ, 我らの痛みが分かるか」
を読んで, 2009. 6, 104号。

丹波マンガン記念館を訪ねて, 2009. 7, 105号。

「君よ, 我らの痛みが分かるか」—朝鮮現代史百年とアメリカ, 2009. 8, 106号。